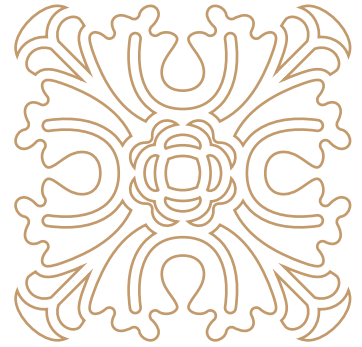


CHOURAKU MIOU

長い楽しみは未だ半ばにもならない
長樂未央



Autumn. 2016 | vol.29



「長樂未央」 第二十九回
いまだ美奈子さん

(洋菓子研究家・食卓芸術プロデューサー)

PROFILE

今田 美奈子 さん (洋菓子研究家・食卓芸術プロデューサー) ヨーロッパ各国の国立の製菓学校やホテル学校で学び、「今田美奈子食卓芸術サロン」(今田美奈子お菓子教室)を主宰。2003年テーブルアートでフランス国家より芸術文化勲章を受章。2011年同国より製菓で農事功労章受章。日本ペンクラブ会員。一般社団法人「国際食卓芸術アカデミー協会」会長。「貴婦人が愛した食卓芸術」(角川書店)他、著書多数。

長楽館オーナー 土手 素子 土手家に嫁いで以後、京都市指定有形文化財「長楽館」の動態保存と活用に情熱を注ぐ。

日常を夢の世界へといざなう

ヨーロッパの伝統菓子と食卓

【長樂未央】日本で初めて、ヨーロッパの伝統菓子を紹介した著書で人気を博し、「今田美奈子食卓芸術サロン」を主宰しておよそ四十年。伝えてきたのは夢のような世界、そして普遍的な教養の世界です。

土手 ようこそお越しくださいました。今年、長楽館はお化粧直しをしたのですが、常に頭にあったのは、今田先生が紹介されてきた伝統的なヨーロッパの美意識でした。ご本を読ませていただいたり講演会へも寄せていただき、兼ねてより憧れておりましたから、お会いできてとても光栄です。

今田 ありがとうございます。とつてもうれいしです。昨年、今年と、高島屋で開かれた「今田美奈子お菓子とテーブルアート華麗なる薔薇のおもてなし」で、東京・大阪・京都・横浜を巡回しましたが、「三代でファンです」って来て下さるのは京都ならではのことだなあと感激いたしました。

土手 私も展覧会へ寄せていただきましたが、物語やお姫様にまつわるお菓子やシユガーデコレーション、テーブルコーディネートなどすべてが夢の世界でした。膨大な数の著書が出版されていて、先生を通してヨーロッパのお菓子のことを知ったという方は日本中に大勢いらっしゃる。伝統菓子には何かの定義の様なものはあるのですか？

今田 〴〵何世紀もの間、同じ形と名前であされてきたお菓子でしょうか。フルーツなど特産品を使っ



た、その地名の付いた地方菓子、シューやトリュフなど、名前に物の形が付いたもの。また、歴史上の人物が愛し、それで知られるようになったお菓子、例えばマドレーヌなど。共通しているのは、長い間の好みの変化にも耐え抜いてきたお菓子。シンプルであるからこそ味わい深い、本物のお菓子です。

土手 なるほど。先生は食卓芸術というジャンルも確立されました。私たちにとって食卓は日常ですが、宮殿での宴席などでは、芸術という言葉がしっくりくるような気がします。展覧会でもアントワネットの食卓が再現されていましたし。

今田 食卓芸術は日常を夢にし非日常にするものなんです。たとえば現代でも、食器・グラス・カトラリー、テーブルクロス・ナプキンを並べますよね。それを会の趣旨や場所に合わせて、時代考証の雰囲気をもともので揃えると、食卓芸術の第一歩。いかめしいバロック調、繊細で華麗なロココ調、アントワネットのイメージでパステルカラーに統一する

など。それをするためには知識と教養が必要です。本も読まないといけませんし、おもてなしのためのマナーも身に付けたいといけません。ただ飾るだけではなくて総合的な教養だと思っんです。そしてそれは、特に海外から大切なお客様、要人を招く際には今も必要なもの。奥様がよく、そういう必要性からうちのサロンへ学びに来られています。

土手 教養として普遍的なものですね。

今田 そう思います。事務的なね、外交とかビジネスの交渉のあとには必ず食事が入りますよね。ランチでもアフタースーンティーでもいいんですけど、そこでふっと、柔らかな和やかな雰囲気になって、セクターピースひとつで会話が弾んだりします。そういう場を作るのが食卓芸術なんです。

座右の銘は「伝統は永遠の流行」

土手 先生は確かスイスの国立の学校でお菓子を学ばれたのですよね。

今田 ええ、そうです。一九七一年、三十六歳のときだから比較的遅かったんですよ。しかも子どもが二人いる主婦で、バティシエになろうとも思っていなくて。
土手 それがなぜスイスへ？

今田 運命の出会いとしか言いようがないです。友人のお父様が、バティシエを外国の国立のお菓子学校へ短期研修で連れて行くというお話を聞いて、その友人に「見るの？ 作るの？」と聞いたら、デモンストラーションで、一カ月集中で知識を学ぶというので、作らなくていいんだな、と。まだ外国へ行くのが大変な時代でしたが、(先の東京)オリソピッ

クダ、万博だと、世界を知り、同時に自由を意識し始めた頃だったのですね。だから今がチャンスと思いい、作戦を練って「行きたい」と手を挙げたんです。

土手 その作戦は成功されたというわけですね(笑)。

今田 そういうことです(笑)。明治生まれの母は、「私たちの頃は、女が自由に何かするなんてとても叶わなかった」と。「一カ月、夫や子供が不自由しないように私が面倒をみるけれども、あなたが選んだ夫が駄目というなら私はノンダ」と、それを夫と私の前で言いましたね。夫は何も言わなかったので、これはいいということにしようと思ったわけ。でも母からはひとつ条件があると聞かれました。「これから十年、二十年すれば日本もお膳ではなくテーブルの時代になる。あんころ餅といちごのショートケーキだけ、という時代も終わると思うから、これだけみんなに世話をかけて行くのなら、本物をちゃんと学んで、それを日本に伝えるという意気込みで行きなさい」ということでした。それは今も私の目標です。

土手 生きるのに必死という時代から日本が外へ向き始めた頃。それにしてもお母様は新しい考えをお持ちだったのですね。

今田 母はお客様をおもてなしするのが好きで、でもその頃まではいわば、自己流の創意工夫だったのです。いかに知恵を絞ってご馳走を作るかがおもてなしの基本でした。そういう時代でなくなったとき、本物が求められると直感していたのでしよう。ただ、一緒に行ったバティシエの方々にはショックを受けておられました。日本でいちごのショートケーキがよく売れている時代に、ヨーロッパの伝統のお菓子って地味で素朴だから。こ

ういうのを習いに来たわけではないということですね。

土手 あの時代のことですからわかる気がします。

今田 とろろが私は、マドレーヌはベルサイユ宮殿で大変人気になったお菓子で、貝の形、いかにもおいしそうな焼き色と香りが、お茶の時間を最高に贅沢なものにする、ですとか、そういうことに興味を湧いて、帰国したものの、今度はオーストリアやドイツにも研修に行くというので、そこにも参加したんです。そういうことがあって主婦の友社から本を出すことになりました。

土手 それで、いわば先生のお菓子の世界のデビューですか？

今田 ええ、そうなります。「ぶきつちよにも作れるケーキとクッキー」という本でしたが、大変よく売れて、ちょうどケーキ作りがブームになった頃で、特に高校生のお嬢さま方が「あなた、あれ持ってる」って話題にして下さるほどだったんです。

土手 お母様のおっしゃる通りになったわけですね。チーズケーキのブームも先生がきっかけだったとか。

今田 あれは雑誌「Non・no」の初代編集長のお陰が大きいです。私がお菓子教室を始めた頃に、「Non・no」にも何かレシピを、ということ、丸いケーキが主流なので四角い型で抜くチーズケーキもいいんじゃないかと思ひ、そうしたんですね。私としては女性誌ですからデコレーションもしておしゃれに、と思ったのですが、「飾ってしまうと読者が私には無理」といって敬遠します。どうぞそのまま紹介して下さい、「いろいろやると日本人は飽きてしまうし、何より伝統は永遠の流行ですから」とおっしゃって、心が軽くなりました。レシピは人気投票でも二位に

なり、今ほど一般的でなかったチーズケーキがいろいろなお店に置かれるようになったんです。以来、「伝統は永遠の流行」は私の座右の銘になりました。

土手 なんていい言葉なんですよ。その通りに先生は時代とともに歩んで来られ、「本物を伝えなさい」というお母様の教えが「今も目標」とおっしゃる。これからの活躍もますます楽しみです。

今田 本物を求める、心の交流を求める今の時代だからこそ、まだまだ伝えたいことはありますね。二〇〇九年に高島屋新宿店でオープンしたカフェ「サロン・ド・テ・ミュゼ・イマダミナコ」をベースに、湯河原にある別荘「銀河館」、これはコンドル作品の日本最初の西洋建築を移築したのですが、そこでも教室やサロン講座を開いております。特に若い方の受講が多く心強いです。今後は、近隣諸国の方にも参加していただけるサロンにしたいと思っています。

土手 先生の世界はさらに広がっていきそうですね。期待しております。本日はありがとうございました。



今田美奈子ブランドのアクセサリー誕生
 マダムイマダ *Madam Imada*

今田美奈子の優美な世界観を表現したジュエリーコレクションが誕生いたしました。最新のシリーズは「ポルトボンヌール」。

願いごとが叶う「流れ星」や、財運をもたらすといわれる「黒猫」など、幸運の扉が開くように、世界中で有名なお守りの形をデザインしました。



【お問合せ先】TEL 0120-1544-1277
 ディアヴァンテ株式会社
<http://www.divante.jp/madamimada/>

素子の coffee break

「紳士淑女とは、いつどんな時であつても、周りの人々を心地よくさせる人」とか。遠くから憧れの先生でしたが、近しくお話を伺いして、立ち居振る舞い、言葉使いなど、すべてにおいて淑女そのもの。私たちみんなを心地よくさせていただきました。一歩でも近づきたい。私の目標がまた一つ増えました。



二人のウェディングを華麗に彩る 重厚感あふれる京の迎賓館

京都市指定有形文化財に指定された建物や調度品などすべてに
洗練された美意識と技術が注がれています。

百余年という時を経た色あせない輝きは
挙式や披露宴を気品あるものにしてくれるとともに
ここに集う人すべての心に、華麗なるウェディングシーンを
印象づけることでしょう。





Introduction of Chourakukan

【長楽館紹介図鑑】

vol. 18

「思い出の場所」

長楽館ウェディング チーフプランナー 杉浦 智子



私 が長楽館に初めて訪れたのは、ウェディングプランナーとなりまだ間もない頃でした。

当時の面影を色濃く残している建物や対応して下さったスタッフの温かさに感動し、『いつかこんな会場で結婚式のお手伝い如果能したら…』と。そんな夢が叶い、今、思い出の場所で結婚式という大切な1日のお手伝いをさせていただいています。

相談にお越しいただく方々は様々なご縁で足を運んでくださっています。『幼い頃家族と来た思い出の場所』『初デートやプロポーズの場所』etc…、そんなお二人の想いがゲストに届けられるよう、何ヶ月もかけ結婚式の準備を進めていきます。それぞれの想いが形となり、感謝が届けられるかけがえのない1日。そのお手伝いをさせていただいていることがとても幸せです。

結婚式後、長楽館はお二人はじめゲストの皆様が大切な時間を刻んだ思い出の場所となり、毎年記念日にお越しいただく事が多いです。『今もあの1日が忘れられないです』『家族が増えました』、色々な報告を聞かせていただく時、幸せを感じます。これからも皆様とのつながりを大切に、多くの出会いに感謝し、楽しみながら特別な1日のお手伝いをして参りたいと思います。



SUGIURA TOMOKO

愛知県出身

オフィスワークを経て、ウェディングプランナーへ転職。

ゲストハウスやレストランでのウェディングを経験し、2014年長楽館入社。





迎賓館へようこそ



episode 19. 山茶花の御局

「明治も末頃、権掌侍として宮仕えしていた山茶花の御局は昭憲様にお仕えしていたが、かなりの美貌を見染められ思わぬ所から縁談を申し込まれた。それは明治の煙草王として一代で財産を成した村井吉兵衛氏である。

当時サンライズと言う煙草が当たり銀行家でもあった村井氏は長楽館と言う別荘を建て（明治42年）、その豪華さは京都の迎賓館として使われただけあって実に立派な建物であった。」

（「あやめ艸日記」花山院慈薫著 淡交社）



【御成の間】

◎死別、そして再婚

大正5年のはじめに妻宇野子に先立たれた村井は、村井関係の事業会社のほか、東京商業会議所特別議員、帝国ホテルほか、多くの社長・役員をかねていて、夫人亡き後社交にも不自由を感じていたところ、金子堅太郎、渋沢栄一らのすすめで再婚を決意した。お相手は明治天皇の皇后、正憲様にお仕えしていた女官薫子、山茶花の御局である。明治天皇が崩御されて、仕えていた女官も宮中から身を引き、薫子も兄の子爵・日野西資博氏に身を寄せていたところ、大正6年牧野伸顕の媒酌により再婚した。なお引用文にある権掌侍は、女官の中でも特に高い階級で、華族出身の者だけの地位であったという。

◎あやめ艸日記

「あやめ艸日記」は、御寺御所大聖寺門跡第27世門主花山院慈薫尼公が記されたものである。（大聖寺は皇室ゆかりの寺として名高く、慈薫尼公は公爵・花山院親家の3女。平成18年没）本稿初めの引用文（平成10年稿）は、続く。「私が13歳（大正11年）の10月始めに喝食のおすべらかに縫模様の着物姿を、父の従妹に当たる村井薫子様に見せたいと思召した慈栄お師匠様は、丁度、長楽館に滞在しておられるという事で御挨拶に連れて行かれた。始めて見る異国的な建物に先ずびっくり、話に聞いていた鹿鳴館の貴婦人達を思い浮かべる様な華麗な内部の作りに子供心に感動し目を見張ったものだった。」（前掲書）

◎薫子様への贈り物

本連稿は村井が長楽館の完成を記念して、知人に贈った写真帖を基に綴っているのだが、そこに御成の間の写真は収録されていない。階

段を上りきった正面の襖を開けたところに位置するが、実は当時、お成りの間はまだなかったのである。1919（大正8年）に3階は改造され、今日の姿になった。3階は1・2階とは全く別世界である。純和風の書院造。折上げ格天井、金粉を散りばめた襖絵、床の間、華頭窓、どれも重厚かつ豪華。宮中の御殿さながらである。山茶花の御局が嫁いで2年。この改造は、宮中の続きのままの生活が出来るようにと、村井から華族出身の宮中女官だった薫子様への贈り物だったのだろう。東山三十六峰が眼前に広がり、四季の移ろいが見事な借景となっている。

（吉村 井兵衛）



◀ 当時の3階



現在の ▶
御成の間